【教育長賞】学校給食と私の成長

作野小学校　井上　育美

「今日の給食、何かな。」

四時間目の授業が終わると、ろうかから給食のにおいがします。私にとって学校給食は、毎日の学校生活の中で一番の楽しみです。お腹がペコペコな時にみんなで食べる給食は、一番おいしいです。最高学年である六年生になって一学期が終わった今、私は毎日の給食を、これまでとは少し違う気持ちで味わうようになりました。

ふり返ってみると、一年生の時の給食時間は今とは全く違っていました。当時の私にとって給食の量は多く、

「時間内に食べきれるかな。」

と不安になることもありました。ごはんをもりつけるのも一苦労で、手に米つぶがついてイライラしたことも覚えています。しかし、六年生になった今は、どんなメニューでも残さずおいしく食べられるようになりました。体が大きくなり、食べられる量が増えただけではなく、苦手だった食べ物のおいしさに気づくことができたからです。給食を通して、私は自分の成長をはっきりと思っています。

さらに六年生になってからは、残っている野菜やおかずをもったいないと感じて、じゃんけんに勝った人が食べるというもったいないを少しでも減らすクラスの活動に参加しました。残っていた野菜やおかずがなくなり、もったいないがなくなりました。

また、高学年になって委員会活動などを経験するうちに、給食の裏側にあるたくさんの「努力」にも目が向くようになりました。毎日、栄養バランスを考えてこん立を作ってくれる栄養教諭の先生。何百人分もの食事を早くから大きなかまで一生けん命作ってくださる調理員さん。そして、新せんな食材を育てて届けてくれる農家の人々です。私たちの

「おいしい。」

という笑顔の裏には、これほど多くの人たちの支えがあるのだと知りました。以前はただ

「おいしい。」

と食べていただけの給食でしたが、今は一口ごとに感謝の気持ちと、食材を大切にしようと思いました。

九月から始まる二学期からも、毎日の給食時間を今まで以上に大切に過ごしていきたいです。小学校生活は卒業までまだ続きます。だから、日々の給食を作ってくれた人たちの苦労や、食材を作ってくれた人たちへの感謝をしっかりと思いながら、これからも食べていきたいです。そして、クラスの仲間とたくさんの楽しい思い出を作りながら、毎日一粒も残さずきれいに食べることを意識したいです。